蒼穹

梶井基次郎

ある晩春の午後、私は村の街道に沿った土堤の上で日を浴びていた。空にはながらく動かないでいる巨き(おお)な雲があった。その雲はその地球に面した側に藤紫色をした陰翳(いんえい)を持っていた。そしてその尨大(ぼうだい)な容積やその藤紫色をした陰翳はなにかしら茫漠(ぼうばく)とした悲哀をその雲に感じさせた。

私の坐っているところはこの村でも一番広いとされている平地の縁(へり)に当っていた。山と渓(たに)とがその大方の眺めであるこの村では、どこを眺めるにも勾配のついた地勢でないものはなかった。風景は絶えず重力の法則に脅かされていた。そのうえ光と影の移り変わりは

渓間にいる人に始終慌(あわただ)しい感情を与えていた。そうした村のなかでは、渓間からは高く一日日の当るこの平地の眺めほど心を休めるものはなかった。私にとってはその終日日に倦(あ)いた眺めが悲しいまでノスタルジックだった。Lotus-eater の住んでいるといういつも午後ばかりの国――それが私には想像された。

雲はその平地の向うの果である雑木山の上に横(よこ)たわっていた。雑木山では絶えず杜鵑(ほととぎす)が鳴いていた。その麓(ふもと)に水車が光っているばかりで、眼に見えて動くものはなく、うらうらと晩春の日が照り渡っている野山には静かな懶(ものう)さばかりが感じられた。そして雲

はなにかそうした安逸の非運を悲しんでいるかのように思われるのだった。

私は眼を溪(たに)の方の眺めへ移した。私の眼の下ではこの半島の中心の山彙(さんい)からわけ出て来た二つの溪が落合っていた。二つの溪の間へ楔子(くさび)のように立っている山と、前方を屏風(びょうぶ)のように塞(ふさ)いでいる山との間には、一つの溪をその上流へかけて十二単衣(ひとえ)のような山褶(やまひだ)が交互に重なっていた。そしてその涯(はて)には一本の巨大な枯木をその巓(いただき)に持っている、そしてそのためにことさら感情を高めて見える一つの山が聳(そび)えていた。日は毎日二つの溪を渡ってその山へ落ちてゆくのだったが、

午後早い日は今やっと一つの溪を渡ったばかりで、溪と溪との間に立っている山のこちら側が死のような影に安らっているのがことさら眼立っていた。三月の半ば頃私はよく山を蔽（おお）った杉林から山火事のような煙が起こるのを見た。それは日のよくあたる風の吹く、ほどよい湿度と温度が幸いする日、杉林が一斉に飛ばす花粉の煙であった。しかし今すでに受精を終わった杉林の上には褐色がかった落ちつきができていた。瓦斯（ガス）体のような若芽に煙っていた欅（けやき）や楢（なら）の緑にももう初夏らしい落ちつきがあった。闌（た）けた若葉がおのおの影を持ち瓦斯体のような夢はもうなかった。ただ溪間に

むくむくと茂っている椎(しい)の樹が何回目かの発芽で黄な粉をまぶしたようになっていた。

　そんな風景のうえを遊んでいた私の眼は、二つの溪をへだてた杉山の上から青空の透いて見えるほど淡い雲が絶えず湧いて来るのを見たとき、不知不識(しらずしらず)そのなかへ吸い込まれて行った。湧き出て来る雲は見る見る日に輝いた巨大な姿を空のなかへ拡げるのであった。

　それは一方からの尽きない生成とともにゆっくり旋回していた。また一方では捲きあがって行った縁(へり)が絶えず青空のなかへ消え込むのだった。こうした雲の変化ほど見る人の心に言い知れぬ深い感情を喚(よ)び起こす

ものはない。その変化を見極めようとする眼はいつもその尽きない生成と消滅のなかへ溺（おぼ）れ込んでしまい、ただそればかりを繰り返しているうちに、不思議な恐怖に似た感情がだんだん胸へ昂（たか）まって来る。その感情は喉（のど）を詰らせるようになって来、身体からは平衡の感じがだんだん失われて来、もしそんな状態が長く続けば、そのある極点から、自分の身体は奈落のようなもののなかへ落ちてゆくのではないかと思われる。それも花火に仕掛けられた紙人形のように、身体のあらゆる部分から力を失って。——

　私の眼はだんだん雲との距離を絶して、そう言った

感情のなかへ巻き込まれていった。そのとき私はふとある不思議な現象に眼をとめたのである。それは雲の湧いて出るところが、影になった杉山のすぐ上からではなく、そこからかなりの距(へだた)りを持ったところにあったことであった。そこへ来てはじめて薄(うっす)り見えはじめる。それから見る見る巨(おお)きな姿をあらわす。――

私は空のなかに見えない山のようなものがあるのではないかというような不思議な気持に捕えられた。そのとき私の心をふとかすめたものがあった。それはこの村でのある闇夜の経験であった。

その夜私は提灯(ちょうちん)も持たないで闇の街道を歩いてい

た。それは途中にただ一軒の人家しかない、そしてその家の燈がちょうど戸の節穴から写る戸外の風景のように見えている、大きな闇のなかであった。街道へその家の燈が光を投げている。そのなかへ突然姿をあらわした人影があった。おそらくそれは私と同じように提灯を持たないで歩いていた村人だったのであろう。私は別にその人影を怪しいと思ったのではなかった。しかし私はなんということなく凝っと、その人影が闇のなかへ消えてゆくのを眺めていたのである。その人影は背に負った光をだんだん失いながら消えていった。網膜だけの感じになり、闇のなかの想像になり――つ

いにはその想像もふっつり断ち切れてしまった。そのとき私は『何処(どこ)』というもののない闇に微かな戦慄(せんりつ)を感じた。その闇のなかへ同じような絶望的な順序で消えてゆく私自身を想像し、言い知れぬ恐怖と情熱を覚えたのである。——

その記憶が私の心をかすめたとき、突然私は悟った。雲が湧き立っては消えてゆく空のなかにあったものは、見えない山のようなものでもなく、不思議な岬(みさき)のようなものでもなく、なんという虚無！　白日の闇が満ち充ちているのだということを。私の眼は一時に視力を弱めたかのように、私は大きな不幸を感じた。濃い

藍色（あいいろ）に煙りあがったこの季節の空は、そのとき、見れば見るほどただ闇としか私には感覚できなかったのである。

底本：「檸檬・ある心の風景」旺文社文庫、旺文社
１９７２（昭和47）年12月10日初版発行
１９７４（昭和49）年第４刷発行
入力：j.utiyama
校正：野口英司
１９９８年10月20日公開
２００５年10月５日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。